



“和漢三魚”

ふるさと探訪

新々の記

旬な三魚

明鏡国語辞典の編者である北原保雄先生は、「表題とした『問題な』も味な使い方だと思っが、問題のある表現である…」と、問題な日本語のまえがきで述べておられる。これに準えて、「旬な三魚」と扱ってみたいので、意のあるところをお察し願いたい。本来はやはり「旬の三魚」であろうが…。

氷下魚…こまいである。タラ科の海水魚で、北海道では根室地方で冬季に海面の氷を割った穴から釣り上げるので、氷下魚とは正に「ワタリ」の魚であり、練り製品の材料とされる。日本海や北太平洋に分布し、タラより小さく、アイヌ語に由来したともいわれる「かんかい」という呼び名の方が本道では通称ともいわれる。

乾氷下魚もあって、「鯛」とはまた「味ちがつた乾氷下魚だよ」、「噛めば噛む程「マイ」もい味だな」と鼻水をすすりながら、固い「マイ」にかじりついた山スキーでの幼馴染み。去年の暮れに札幌地下街で会合した時の第一声は、お互いに自分の歯「だよな」であった。

氷下魚釣「一」の穴を「ひたまもり(鶉衣)であり、乾氷下魚「歯堪

えのある「夜会かな未知留」と思いつくのも、「マイ」の味が忘れられないからであろう。(鶉衣「破れ衣」) 所謂「えは、氷下魚汁もまた「旬な味」としてタラ汁に勝るとも劣らないおふくろの味であり、「三平汁 鮭・鱒・氷下魚 北帰行(咲実)である」。

公魚…わかさぎである。キョウリウオ科の小形魚で、冬季の湖沼に穴をあけて釣り上げる妙味が人気を呼び、正に冬の風物詩そのものといえよう。汽水域(海水を淡水が混じり合う区域)から淡水域にすみ、北海道から九州に至る各地の湖沼に生息する公魚は、鮎・鮎・桜魚などの別名もあり、鮎とよく似ているともいわれる。

公魚の「跳ねる桶の」は「こはる(龍舌)であり、公魚の「天から楚々と」湖の呼気(枯舟)である。所謂「えは、阿寒湖でのいたまじい事故を思っにつけても、氷上での釣りには念には念を入れて楽しみたいものである。所謂「えは、わかさぎに「ほのめく梅の」句かな(万太郎)と「はならな」から「はる」春告魚…に「しん」である。読んで字の如く、正に春を告げる魚で、鱧・

鮎かどいわし等ともいわれている。鱧群来「番屋も春も「遠くなら(礼)こ」なうてはいたが、近年また回遊の兆しが見えて、再び「旬な味」が蘇るのかも知れないようである。

所謂「えは、草葺き屋根の軒下に「フリ」ずつり「ぶら」下がった「開き」ニシンのお八つは「美味満点」だつたし、「ニシン漬の独特の旨味は食欲を誘ったし、そして「数の子と白子」はそれぞれの風味で食卓を賑わしたが、今は、数の子も高価な逸品となっているのである。

「電車と連結した台車で運んだニシンを、駆で配給された太平洋戦争のころが目に浮かぶぞ」、「身欠き鱧とラキの煮物は今でも舌に残っているぜ」と語り合っつのは、級会での腕白小僧たち。鱧焼く「壁に古りたり」日本地図(鱧)も今は影も形も無いけれど、鱧御殿やカラオケの歌を見聞する今が旬と思っが、さて…。

(元)郷土史編集専門員
尾池隆男

発行/東川町役場 編集/秘務住民課 Tel.82-2111
表紙写真/松野智久 印刷/株須田製版

URL <http://town.higashikawa.hokkaido.jp/>

No.618 APRIL 2005

人口 / 7,597人(前月比4人) 男 / 3,634人(前月比 2人) 女 / 3,963人(前月比6人)
世帯数 / 2,926戸(前月比1戸) 出生 / 5人、死亡 / 6人、転入 / 14人、転出 / 14人 【2月28日現在】
住民登録の手続き上、人口増減と出生・死亡・転入・転出の増減は一致しないことがあります。



本誌の印刷には、大豆インクを使用しています。また用紙には再生紙(100%)を使用しています。